

生活期における脳血管疾患患者の日常的な外出に必要な因子の検討

野本 正仁¹⁾ 石森 卓矢¹⁾ 腰塚 洋介¹⁾ 宮地 由樹²⁾ 美原 盤³⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 リハビリテーション部

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経外科

3) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経内科

[はじめに]我々は、高齢者の日常的な外出に必要な因子について、ADL能力の視点から分析を行い、移動の自立が重要であると報告した。しかし、ADL能力以外の要因について詳細な分析を行っていない。今回、移動に係る項目に加え、環境因子などから日常的な外出に必要な因子について検討した。

[方法]2014年から2020年までに訪問リハを利用し、移動が自立となった脳血管疾患患者98名を対象とした。外出実施と未実施を目的変数、年齢、車椅子使用有無、家族構成、外出の目的地が近隣にあるかなどを説明変数に設定し、ロジスティック回帰分析を行った。

[結果]外出に必要な因子として、外出の目的地が近隣にあることが抽出された($p < 0.05$)。

[考察]移動が自立しても外出の目的地が遠方にある場合、日常的に外出することが困難となる可能性がある。訪問リハでは、移動自立に向けた介入に加え、外出の目的地について段階的に目標を設定することが重要と思われる。